# おじさんズ通信

２０２３年１月号（Ｎｏ２６）
発行元：登別市新生町４丁目緑風舎
発行者：おじさんズ３号
Web
http:www.ne.jp/asahi/takanet/mori/


**本を探す**

## ウクライナの国民的詩人

ある翻訳本を本腰で探そうと決めたのは新年早々、「ロシア侵攻と重ね、抵抗誓う国民的詩人誕生日で集会」とのタイトルが打たれたネット動画を見つけたからでした。

昨年３月１０日に共同通信が流したもので旧聞に属しますが、ウクライナ西部リビウで配信日前日の９日に開かれた集会を伝えるものでした。

国民的詩人とは、近代ウクライナ語文学の始祖といわれるタラス・シェフチェンコ（１８１４年３月９日―１８６１年３月１０日）。彼は当時のロシア帝国ウクライナ領キーウ県の村に生まれ、２０代のころ画家としての才能や文才が認められ農奴の身分を解かれました。その後、反農奴制、反帝国主義の政治的物語詩を書き、１０年間の流刑生活を送りながらもウクライナの民として、作品を通しロシアへの抵抗を続けました。

シェフチェンコの銅像の前で開かれた集会で、「市民らは『敵の血で自由を祝福しよう』などとうたった代表的な詩『テスタメント』を合唱し、それぞれ好きな詩を朗読」「侵攻を受けた現在とシェフチェンコ存命時の状況と重ね合わせ、ロシアへの抵抗を誓った」と報じています。

## 室蘭の作家も３５年前に、

３５年前、そのシェフチェンコが著した本と人物像を紹介した作家が室蘭にいました。

かなまる よしあき氏。昭和６２年１０月１４日付室蘭民報文化欄に掲載された「シェフチェンコ讃『画学生―残されたマドンナ―』を読んで」と題する文章がそれです。

寄稿するきっかけとなったのは、やはり室蘭で文化活動に携わる女性から、日高地方に住む親類が長年かけて「画学生」というシェフチェンコの小説を翻訳、出版したので出来れば広めてほしい、と依頼されたといます。

この一年　朝日のようにさわやかに

シェフチェンコ讃
「画学生―残されたマドンナ―」を読んで
かなまる よしあき

小説「証人台」（第１３回道新文学賞）などで知られる氏は、ロシア文学にも詳しかったようで「詩の専門家ではないから断言出来ぬが、ソビエトでは国民的詩人として詩『コブザリ（吟遊詩人）』だけでも２，８００万部も読まれている」とシェフチェンコの作品について語っています。「ソビエトでは」としたのは、ソ連崩壊（１９９１年１２月）前の執筆で、ウクライナがソ連の構成共和国だったためでしょう。

詳しく紹介できないのが残念ですが、文末で「チエホフは『コブザリ』を読んで『タラス・シェフチェンコのような、これほどのティタン（巨人）を世に出したウクライナ民族を敬愛する』と手紙に書いた」と記し、「『画学生』を一冊でも広い読者に」読んでほしいーと結んでいます。

## その「画学生」いずこに

たまたま家の中を整理していたら出てきた、三十年余前の新聞の切り抜きが、「読んでみなさい」と催促しています。（ロシア侵攻がなかったら、その気にならなかっただろう、この尻軽男が）とのそしり無きにしもあらずですが、かなまる氏とは若いころに文化関係でのやりとりなど多少の面識もあり、ご存命であればOKサインを出してくれるでしょう。

で、その「画学生」探し。ネットの古本市場で調べたところ、たった１冊出てきましたが、残念ながらSOLD・OUT。西いぶり広域図書館や道立図書館などを検索しても、出てきません。

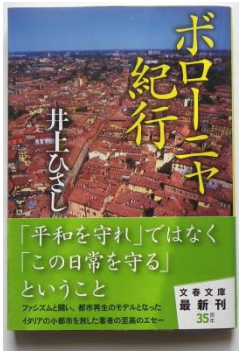
見つからないとなると、探索意欲は一層かき立てられるもの。次なるターゲットは地元の文芸関係者や出版元と定め、年始休暇明けに始動です。

どなたか、心あたりのある方はお手数でも、ご一報いただければ、感謝感激です。

本を買う

## 「ボローニャ紀行」

井上ひさしフアンなら、すでにお読みになられているでしょう「ボローニャ紀行」。昨年暮れ、当地方の植物などに詳しいＭさんから、自身が主宰する集まりの過去の会報が送られてきました。その中で、この本が紹介されており、まだ読んでいない身だけに早速、近くの古本屋さんに直行、幸い１冊だけ見つけました。




「あとがき」の最後に（初出は「オール讀物」２００４年２月号）とあり、２０年ほど前に世に出したイタリア小都市の紀行文になりますが、どの章を読んでも、井上図書館に遅れて到着した私の胸を打ち、知識を深耕させるものばかりです。そして、腰巻（失礼）にある「**『平和を守れ』ではなく『この日常を守る』ということ**」の一文が、イタリアの小都市から学ぶべき何かを示唆しています。

・自分のせいでもないのに仕事や住まいを失ってしまうとき、「自己責任」なんて冷たいコトバは使わない。困っている人間がいたら、とりあえず手を差し出してあげる。これを「ボローニャ方式」といい、世界のあちこちの都市が手本にしている（「大きな広場」）

・過去の紡績機技術を基に、リプトン紅茶や伊藤園の日本茶ティーバッグを包装する、パッケージング機械産業を発展させたボローニャ。産業博物館の館長が言いました「困難にぶつかったら過去を勉強しなさい。未来は過去の中にあるからです」（「街の動力」）

・古い映画フィルムの修復に若者たちが組合を結成した。そのとき助けてくれたのが行政と地元銀行と大学の映画サークル。その後、あのマチにはフィルムを修復するすごい技術があると広まり、二十世紀フォックスやコロンビア映画社が山のような古いフィルムを持ち込んできた。（「チャップリン・プロジェクト」）

## 「どうだ、いい街だろう」

読み終えて、もう３０年前になる観光関係の講演会で、講師が口にしたひとことが思い浮かびました。

「外国に行ったら、街中で出会った住民が自信たっぷりに『どうだ、いいマチだろう』と胸を張って挨拶します。ひるがえって日本では、どうでしょう」

古い町並や先進的な建築群といった外観も魅力の一つかもしれませんが、それ以前に大切なのは共同体として支え合い、住んでよかったと思える街づくりに力を合わせる大切さを、この紀行文は説いています。

## 男も女も「つらいよ」だ

これ、大事にとっておいた１枚では―と推察されるハガキが昨年暮れ、市内のＫさんから届きました。通信面を飾るのは、映画「男はつらいよ」２９作目の寅さんなど４人の配役。手に取った瞬間、すぐに顔がほころびます。まさにトラは死して、皮ならぬ、笑いを残す（？）。

寅さんに対抗して作ったらしい「女はつらいよ」なる歌をご存じですか。作詞作曲は広島出身のシンガーソングライター、二階堂和美さん。この方、確か僧侶でもあったような。興味がおありの方は、ｙｏｕ―ｔｕｂｅなどでご覧になれます。

「男はつらいよ」で、近頃つくづく思うことがあります。第１作目で渥美清が「殺したいほど惚れてはいたが／指もふれずにわかれたぜ」（北島三郎「喧嘩辰」の一節）と歌うシーンがあります。しかし最近、男女の交際や結婚のもつれから、本当に殺してしまう怨恨殺人や傷害に至る事件が増えている気がします。

もし振られたら、赤い糸でつながっていなかったと諦めなよ。新たな伴侶候補は星の数ほどいるじゃないかーと、寅さんも諭しています。

## 待合室川柳で一句

妻が言う
脳トレよりも
脂肪トレ

スティホーム？
もともと金欠
外行けぬ

以前紹介した某クリニックが再び、通院患者さんに呼びかけ川柳を募集中です。今回のテーマは「健康」「スティホーム」「脳トレ」など５つですが、頭をひねくり回してやっと出来たのは２句。恥を覚悟で、紙上にてご披露いたします。クスッと笑ってもらえるかな。

## 薫風　烈風

▶今年夏に発行される「文芸のぼりべつ」に投稿する創作１本に加え、欲を出して史録的な作品を提出しようと、目下、史資料集めに汗しております。題材は、以前にも本通信で触れた幌別海岸での北米航路貨物船「陽天丸」の座礁沈没事故。

大正８年９月１９日未明、サンフランシスコに向かう途中、石炭を積み込むため室蘭港を目指していたこの船が、なぜ針路を誤り、幌別沿岸の浅瀬に突っ込んだのか、沈没に至るまでの経緯を描ければ幸いかな。当時、海岸に漂着した積み荷のひとつ、ノリタケの茶器を大切に保存している人もいるとの情報もあり、今年もがんばるぞー。では皆さん、お元気で～。